

第10科会 キャリア教育

テーマ 「社会に開かれた教育課程の編成とキャリア教育」

提案Ⅰ 「地域とともにある学校づくり」

～地域に学び、地域に貢献～

発表者	岡山県立倉敷まきび支援学校	副校長	小野 浩
司会者	岡山県立岡山南支援学校	教 頭	青木 文宏
助言者	愛媛県教育委員会 特別支援教育課	指導主事	安部 良次

I 実践に当たって

1 学校について

本校は、平成26年に知肢併設の特別支援学校として開校した。令和3年度の在籍児童生徒数は、知的障がい部門284名、肢体不自由部門27名(訪問教育を含む)、計311名で、岡山県内の特別支援学校の中では児童生徒数が最も多い学校である。

開校5年目の平成30年7月の西日本豪雨により、校舎2階の床上まで浸水の被害を受け、約1年間、本校内に建てたプレハブ校舎と近隣の支援学校3校に学部部門ごとに分かれて教育活動を行った。翌令和元年8月に校舎が復旧し、全学部そろって本校地で再開することができた。

本校は、真備町の中心地に近いところに立地しており、地域の方の歓迎の下、開校することができた。また、学校応援団となる「まきび地域学校協働本部」を開校時から設置し、児童生徒が地域に出向いて活躍できる地域資源を生かした授業づくりを大切にしている。さらに、本年度から、県教育委員会の指定を受け、コミュニティースクールとなった。

2 取組のねらい

知的障がいのある児童生徒の課題として、学んだことや獲得した力を、般化したり応用したりするのが難しいことが挙げられる。そのため、学校で身に付けた力を地域社会の中で活用できるようにするための指導や確かめが必要だと考えている。

そこで、本校の立地や地域とのつながりの強みを生かし、学校近隣の施設や商店等の慣れない環境の下、緊張感をもって、場に応じたやりとりをしたり、自己の役割を果たしたりすることによる成就感を感じることでできる体験的な学習を生活年齢・実態に応じて段階的に積み重ねるように教育課程を編成・展開している。

また、真備地域は被災から3年経つが、まだ復興の途上であるため、児童生徒の活躍が地域の方の元気につながるようにしていきたいと考えている。

II 実践内容

1 地域の方との触れ合いを通して(小学部)(資料Ⅰ)

コロナ禍ではあるが、小学部は、校外歩行や現地に出向いての地域の調べ学習などを積極的に行ってきた。校外を集団で行動することで、集団の帰属意識を培った

り、公共施設を使う上でのマナーや、地域の方へのあいさつや、やりとりを大切にしたりしてきた。

校外での興味・関心を引くような体験を通して、教室での関わりを更に広げ、自分から「関わってみたい」「自分の思いを伝えたい」という気持ちを伸ばしていきたい。この時期は、社会性を培う上で大切だと考えている。



〈資料1 調べ学習の様子〉

2 地域の方に喜んでいただけるように (中学部)

(1) プランター配付・花壇づくり (資料2)

中学部農園芸班は、高等部農園芸班が育てた花の苗をプランターに植えて、近隣の学校園等に年2回程配付している。この6月には、近隣中学校の学校だよりでこの活動が紹介され、中学校の生徒から、たくさんのお礼状が届き、本校生徒たちは大喜びした。暑い中、リヤカーで運んだ苦勞が報われた出来事であった。また、今年から、吉備真備駅駐車場横に本校の花壇スペースをいただき、上記写真の校章を形取った花壇を作っている。



〈資料2 花壇づくりの様子〉

(2) 「まきびボラ」の時間 (資料3)

月の最後の木曜日には、校内の清掃・美化に努めたり、地域ボランティアとして学校周辺の道などに落ちているゴミ拾いや公園の清掃をしたり、リサイクル活動として、古い服やタオルを集めてウエスを作ったりする活動に学年単位で取り組んでいる。

「~のために」頑張ることは、働くことへの意欲付けだけでなく、自己有用感を高める上でも意味があると考える。



〈資料3 まきびボラの様子〉

3 卒業後の生活を見据えて (高等部)

(1) 地域型実習 (資料4)

地域型実習では、定期的に地域の老人施設等に出掛けていき清掃活動をしたり、スーパーでの品出しや地域の農場を借りて作付けや収穫などの作業をしたりしている (緊急事態宣言等により、農場での作業以外は、今年度の1学期は中止)。

スーパーでは、常にお客様のことを考え、正確さと礼儀正しさを意識しながら品出しや前出しなどの作業を行っている。地域の老人福祉施設や吉備真備駅などの清掃は、校内でする清掃よりも緊張感があり、いつも以上に丁寧に行っている。そして、その事業所の従業員の方や利用者の方へのあいさつや「お気を付けください」という声掛けなどのコミュニケーションも大切な学習内容とな



〈資料4 地域型実習の様子〉

っている。

(2) 校外販売（資料5）

本校は県下の特別支援学校の中では唯一パンの製造をする作業学習班がある。昨年度から地域で人気のパン屋の方に定期的に来ていただき、技術指導を受けながらパンを焼いている。生徒が作業学習をする中で「地域の方にも食べてもらいたい」と願ったことから、校外に向けてのパン販売をしている。そのことが、地域の方の楽しみになり、生徒の励みにもなっている。



〈資料5 校外販売の様子〉

販売の日には、たくさんのお客様が来校され、パン工房の隣にある喫茶スペースで、パンを買ってくださったお客様にコーヒーを提供するなどの接客を行っていたが、現在は、コロナ禍で飲食は中止している。

西日本豪雨により、機材が流されたことで、パンを焼くことは中断されていたが、一昨年2学期の学校再開後少しずつ道具をそろえたり、練習を積み重ねたりして、昨年度末には地域に向けてのパン販売を再開することができ、当日は、販売を楽しみにしてくださった方々で長蛇の列ができた。また、今年度初めには、岡山高島屋で行われた、「まびふなおフェア」で地域の商工会の方々と共に、パン販売を実施することができた。自分たちの作った製品をお客様に買っていただくことは、学習への意欲付けだけでなく、実感を通して働くことの意義を理解することができたと考える。

(3) ブラッシュアップ事業

本年度、本校は県教委より「プロに学べ！作業学習ブラッシュアップ事業指定校」に指定されている。



〈資料6 ブラッシュアップ事業の様子〉

この事業は、販売力のある製品を作るために必要な商品開発から販売戦略の策定、広告宣伝、効果検証までの一連のプロセスにおいて、企業との連携を重視した作業学習のモデルを研究することにより、特別支援学校における作業学習等の授業改善を図り、生徒の働く意欲の向上に資することをねらいとしている。

研究テーマを「生徒の自己肯定感を高める指導の工夫」とし、高等部においてプロ（専門家）の協力を得て、「校外の“お客様”に評価される製品作り」に取り組んできた。生徒が「自分（自分たち）の仕事が、お客様に喜んでもらえた・認めてもらえた」と感じられるように、作業学習の授業、製品やサービスについて、積極的にプロ（専門家）の方から、教員だけでなく、生徒にも直接技術指導やアドバイスをしていただいている。

Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

校外の慣れない中での活動を通して、場面や相手に応じたやりとり、自分から支援を求めるなど、地域生活をする上で求められる他者との関わる力や社会性を培うことができた。また、現場でのリアルな体験の積み重ね、地域の方との触れ合いの中で、困ったり認められたりして、自分の課題や良さを見つけることができた。また、がんばりや活躍を認められる中で、自己肯定感を高めることができた。こうして培った力が地域社会で豊かに生きる力につながるとともに、本校の校訓である「夢へみんなであっすぐに」の下、自分を肯定的に受け入れ「夢」の実現に向けて努力しようとする意欲を培っていきたいと考えている。

2 課題

本校のキャリア教育全体計画では、地域資源を活用した授業づくりとして、学部ごとの取組内容が挙げられ、これに基づいて校外での学習が日常的に行われている。しかし、この取組が、児童生徒のキャリア発達にどうつながっているかについては、検証が必要である。また、学部の役割を十分意識した授業づくりができていないと言いがたい。今後見直しを図り、ねらいに迫る意図的な場面設定や支援の在り方について再度検討する必要があると考えられる。「自己有用感」「自己肯定感」を、児童生徒が感じ取れるようにするための学習内容・評価等について、更なる研究実践の必要を感じている。

〈指導・助言〉

本実践は、学校で身に付けた知識や技能を、地域の中で発揮することで、より確かなものとし、地域で充実した生活を送ることを目指す取組である。

小学部では関わることの楽しさを覚え、中学部では喜んでもらえる経験を味わい、高等部では地域の中で就労を見据えた活動に取り組むなど、生活年齢・発達段階等に応じて、関わる人や集団が段階的に広がるよう体験的な学習が計画されている。また、地域に開かれた学校である利点を生かして、子供たちが様々な経験を重ねながら成長していく様子を、地域の方々に見守っていただく中で、より深く地域と関われるよう、工夫した教育課程が編成されている。

キャリア教育を進める上で、「子供たちが自ら気付くことを促し、主体的に考えさせ、それを成長・発展につなげていく」ことは大切である。そのためには、例えば、子供たちに気付いてほしいことや指導すべきポイントを地域の方に語ってもらう等、教師の働き掛けが重要である。また、活動後の感想や学んだことを次回の活動に引き継ぐ等、学びの記録を蓄積し振り返ることは、小中高一貫のキャリア教育につながるものである。

「自己肯定感」を育むには、他者から認められることによる「自己有用感」の高まりが重要である。そのためには、子供自身が目標や工夫する点、努力する点等を考え、どこまで達成できたかを評価することが必要である。障がいや重度である場合は、自分が行う活動の内容が分かり、参加している実感をもてるよう工夫しつつ、例えば、一緒に活動する地域の支援者に、その子供の目標を事前に伝えておくことも一つの方法である。

今回の発表は、小学部から高等部まで全体を把握し、将来を見通した取組となっているので、課題としている各学部の役割を意識した授業を行うためには、全ての教職員が全体計画の共通理解を更に進めること、また、全体の中での各学部の取組を見直すことが意図的な場面の設定につながっていくと思われる。

今年度からスタートしたコミュニティ・スクールの仕組み等を活用し、地域の方々と目標やビジョンを共有しながら、地域の力を生かしたキャリア教育の実践を積み重ねていきたい。